

ディケンズの小説から探る英国19世紀の 下層階級と園芸(予報)¹

新妻 昭夫(人間社会学部人間環境学科)

榎本 真理子(人文学部英語コミュニケーション学科)

高濱 俊幸(人文学部文化学科)

19th Century Horticulture among the Lower-Middle and Working Classes in Britain, in Charles Dickens: A Preliminary Reports.

ENOMOTO Mariko, TAKAHAMA Toshiyuki & NIIZUMA Akio

従来の園芸文化史は庭園デザイン論を中心とした、いわば「造園土建史」といってよく、当然ながら貴族など大土地所有者の規模の大きな庭園に主眼がおかれていた。そういった大庭園がどのようなものであったか、またどのような植物が植えられていたかは、各種の著作あるいは図面や絵画として記録が残され、また庭園そのものが現存している場合もある。

また19世紀半ば以降の時代の一般市民の園芸を論じる場合でも、収入と余暇に余裕のできたプチブル階級が大地主の大庭園を、規模を縮小して模倣したステータス・シンボル、すなわち上昇志向のあらわれとされるのが通例であった。それらの庭とそこに植栽されていた植物については、同時代に雑誌や本という印刷媒体が平行して急増したこともあり²、きわめて多数の文献資料が残されている。

その一方、産業革命以来、荒廃した農村から都市に流入しつづけた人々、すなわち下層の労働者階級においても、花嫁の花束や窓辺の鉢植えなど広い意味で「園芸」に含まれるべき文化が以前からあっただろうことは、誰しもが想像しうることはあろう。しかし、彼ら下層階級の庶民のあいだで見られた習慣などが、書籍や雑誌・新聞記事など文献資料として残されることはほとんどなかった。

しかし、唯一の例外と予想されるのが大衆小説である。とりわけチャールズ・ディケンズ(Charles John Huffam Dickens: 1812-70)は当時の下層階級の風俗を詳細に描いたことで知られている。

このプロジェクト研究の目的は、ディケンズの多数の小説を調査・分析することによって、当時の都市庶民階級が園芸をどのように楽しんでいたかを明らかにすることにある。本研究の特徴として、次の二点をあげることができる。ディケンズは研究者層が厚く、そのため全集などがよく揃っている。その反面、当時の庶民の園芸文化に焦点を当てた先行研究は、英文学分野においても、また園芸史分野においてもほとんどないと思われ、いずれの分野においても新たな問題群の発見につながる可能性が低い。

ただし初年度は調査を予定通りには進めることができなかったため、本稿では次の二点について報告して、本格的な調査のための予報としておきたい。(1)これまでの園芸文化論関係の文献で断片的に扱われてきたディケンズについての記述の整理。(2)ディケンズの作品の試験的な調査。

(1)本研究の開始以前にわかっていたこと

本プロジェクト・チームの三人それぞれのこれまでの研究から、ディケンズの作品に当時の庶民にとっての園芸がどのように描きこまれているかについて、いくつかの断片的な情報がえられていた。まずはそれについて簡単に整理しておくべきだろう。

新妻はJ・S・ヒバード(園芸ジャーナリスト)についての研究³のなかで、ディケンズの作品に描かれた下層庶民の園芸趣味の描写を2例引用し、ヒバードとディケンズが同時代人であり、ともにロンドンの下層階級の出身であったことを指摘した。2例のいずれも先行研究からの孫引きであり、そのうちの1例は英文学者で庭園論の第一人者、故・川崎寿彦氏⁴の研究である。

川崎寿彦氏の著作のうち、次の2冊にディケンズからの引用がある。中公新書の『楽園と庭』⁵と、没後に刊行された遺稿集『楽園のイングランド』⁶である。まずは前者から見直しておこう。

『楽園と庭』は、英国の中世から近世にかけての庭園史を分析した名著『庭園のイングランド』と共通の主題を、近代社会の成立過程における庭園＝楽園

パラダイムの変遷、すなわち「楽園の一つの形態を放棄する過程」に焦点をあてて論じ、エピローグ「おわりに」でディケンズの作品から題材がいくつか選出されている。

晩年の作品『我等が共通の友』（1864～65年）からは、「思いがけず大きな遺産と屋敷を相続したボフィン夫妻」の「陰惨なロンドンの下町の一画に位置する屋敷」と、「ジプシー会社」という「ロンドンの下町のけちな金融会社の……屋上ミニ庭園」である。

ボフィン夫妻の屋敷の「裏庭にはロンドン中のごみを集めて積み上げたポタ山がいくつかあるのだが、その一つ一つに“うねうねと曲がった散歩道”をつけて、登りながら“一步ごとに周辺の景色が変化するのを楽しむ”という「貴族の大庭園のマウント（築山）と同じ趣向」、そして「ポタ山のとっぺんには“格子飾りのあずまや”が置かれ、夏にはそこで詩集などを読む」という、いわば成金趣味を指摘する。

もう一方の、金融会社の「屋上ミニ庭園」は、「まっ黒にすすけた煙突……にみじめなツタを巻きつかせ、いくつかの箱にあわれっぽい花とそこばくの緑を配した、庭ともいえぬ庭」である。登場人物がもらすこの庭についての感想から、この「屋上庭園は、死の世界」であること、「楽園のビジョンは、最初から、死者の国と重なっていた」ことが指摘される。

これらの例から川崎氏は、「ディケンズはヴィクトリア朝期の中産階級の胸に生き続ける、楽園への憧憬を、戯画化してくれたらしい」という。そして今日の「われわれは、都会のビルの屋上に、郊外住宅地の庭先に、居間の一隅のガラス鉢園芸に、そして一人一人の心のなかに、個別化された楽園を抱き続けて」いて、「その小世界に保証されたそこばくの静謐と、都市の喧騒との間とを往復する行為は、市民階級にとって、死と再生の間を往復する、ささやかな儀式であるのだろう」と結ぶ。

『楽園のイングランド』は遺稿集であり、ディケンズが取り上げられている章「ロマン派以降の〈庭のイングランド〉（エスキス）」の初出は、没年と同じ1989年である⁷。

庭園の歴史をいくつかの角度から手短かに論じ、庭園や温室の収縮の例として窓際に並べられた観葉植物とともに、19世紀中葉に考案されたガラス製の

テラリウム、すなわち「ウォード箱(Wardian case)」をとりあげ、次のように論じる——「もしく庭>が人工によって自然を捕捉し、縮小して飼育する手段であるとすれば、この種のガラス箱園芸は<庭>の一つの極限の姿を表していたかもしれない——ヴェルサイユ等の整形大庭園や、ブラウンの自然風大庭園が、もう一方の極限を表していたように」。

またディケンズの小説に描かれた「小市民たちの<庭>をめぐるさまざまな哀歌」の例として、前述の『楽園と庭』でも取り上げられていた『我等が共通の友』中の「ボフィンのあずまや」と「ジプシー会社屋上のミニ庭園」のほか、次の例を取り上げている。初期の『オリヴァー・ツイスト』(1837年)の「ディングリー・デル」、晩年の『大いなる遺産』(1860～61年)第25章の「ウェミックの箱庭同然の庭」、そして初期の『ニコラス・ニクルビー』(1838～39年)第40章の次の場面である。

窓際の花の箱には貧しいモクセイソウが植えられ、注ぎ口のとれた水差しにニオイアラセイトウ、靴墨の空き瓶にヒヤシンスが育つ⁸。

川崎氏はこの節を次のように結んでいる——「あまりに物悲しい風景であり、支配階級の大庭園からスタートして小市民のテラリウムまで下降してきた<庭>の、まさに消尽点を暗示すると思われる」。

この結論は、たしかに「ボフィンのあずまや」や「ウェミックの箱庭同然の庭」には当てはまるが、上に引用した『ニコラス・ニクルビー』の場面はどうなのだろう。下降・縮小過程の消尽点というよりは、むしろ最底辺の人間の暮らしにも本来備わっていた花や緑への親近感ゆえの、身近に植物を置きたいという欲求のあらわれではないかと考えてみたい。

この最後の点については将来の課題とすることにして、ここでは、ディケンズが取り上げられている他の庭園史・庭園論をもう数例だけ紹介しておくことにしよう。

伝記作家ジェニー・ウグロウによる英国のガーデニング史⁹では、都会ないし郊外での中産階級のアマチュア・ガーデニングの1例をディケンズ『大いなる遺産』(1860-61年)の主人公ウェミック氏の自宅の庭¹⁰を例にあげて説明

し、このような「10メートル×20メートルの庭」を持つ人のために書いたのがヒバード¹¹だった、と指摘されている¹²。

このほか『ピクウィック・クラブ』（1836～37年）の、タップマン氏が独身の姪を庭のあずまやに誘う場面も引用されている。また興味深い事実として、鬼才造園家ラウドンとその妻¹³の交友関係のなかに小説家ディケンズの名がある¹⁴ことが指摘されている。

また、刊行されたばかりの鉢植え植物の歴史についての本¹⁵にも1箇所、ディケンズの作品からの引用があった。著者は今日の多くの人が描く19世紀英国の貧困のイメージはディケンズの作品によること、またディケンズがしばしば庭を幸福な家族中心の家庭のシンボルとして使い、植物は品のよさの表現であり、そのどちらも欠けていることはその登場人物の不幸で哀れな状態をしめしているとし、そのことがもっともわかりやすい例として『ピクウィック・クラブ』から、債務者拘置所の部屋のなかにいた囚人の妻の描写を引用している。

瘦せぎすのやつれた女性が一人……乾きあがりしなびた惨めな株に、細心の注意を払いながら水をあげていた。もう二度と緑の葉を伸ばさないだろうことは、誰が見ても明白だった——遺憾ながら、彼女がそのために入ってきたおつとめの寓意画そのもの、たぶんそうやってよいのではと思われた¹⁶。

ここでも川崎氏によるディケンズ引用についてと同じことをいうことができる。繰り返しになるが、ディケンズの作品に登場する庶民にとって、一般的には、庭はうらやむべき上流階級の象徴であるとともに、上昇志向の小市民的な価値を具現するものである。だが、最後の囚人の妻が世話する「惨めな株」（おそらく窓辺の鉢植えだろう）は、まったく別物と考えるべきではないのか。川崎氏のいうかつての大庭園の下降・縮小過程の消尽点というよりは、『ニコラス・ニクルビー』の「靴墨の空き瓶に育つヒヤシンス」と同じように、最底辺の人間の暮らしにも花や緑との触れ合いがあったことをうかがわせる。

(2)作品の予備的な調査分析

多数の作品のなかから、①初期の『オリヴァー・トゥイスト』(原著初版:1838年)、②後期のディケンズ『互いの友』(原著初版:1865年)、③クリスマス本の『炉辺のこおろぎ——家庭のおとぎ話』(原著初版:1845年)の三冊を選んだ。作品の時期のほかに選択基準はとくになく、恵泉女学園大学図書館の蔵書中のディケンズ作品の邦訳のなかから手ごろなものを選んだにすぎない。

これらの三冊を通読しながら、庭や花、あるいは菜園などのほか、関係のありそうな記述(および気になる記述)の個所に付箋を貼り、読了後にそれらの個所を抜き書きして表にまとめた(末尾に付した表1~3)。

表1~3を一瞥すればあきらかなように、前段で整理した先行研究の断片的な言及での指摘を確認する結果となった。すなわち、当時の庶民にとって庭園はうらやむべき上流階級の象徴であるとともに、上昇志向の小市民的な価値を具現するものであった。

『オリヴァー・トゥイスト』(表1参照)では、オリヴァーが泥棒家業の手伝いで通り抜ける夜更けの町外れで見かけた金持ちの庭など(No. 01)のほかは、オリヴァーがお供した母娘の郊外の別荘屋敷の花咲き乱れ小鳥が歌う、どちらかという少女趣味的な描写がほとんどである。

『互いの友』(表2参照)は登場人物も多く物語も錯綜しているが、先に紹介した川崎氏の指摘する「ボフィン氏のゴミ山のあずまや」と「ジプシー会社屋上のミニ庭園」のほか、最終的に玉の輿にのったベラ嬢の豪華な新居も、上流階級の象徴であるとともに小市民の上昇志向に合致した趣向といっていだろう。他の個所のほとんども、庶民たちの夢やあこがれの範疇にはいる。

やや外れるのが、学校(16,47,53)の庭である。また、その近くにあった「市場向け菜園」¹⁷(14, 31)がとても気になる。ウィルファー宅の「小さな庭」がどのようなものだったかも気になるが、詳細がわかるような描写はされていない。

『炉辺のコオロギ』(表3参照)には関係のありそうな記述はほとんどなく、唯一個所だけ、「運送屋は……苔と紙で注意深くくるんだちいちゃな花の鉢を取り出し」という気になる記述がある(No. 01)。原文¹⁸を見てみると「carefully preserved in moss and paper, a tiny flower-pot」であり、その鉢植えの

花を受け取ったのは「貧しい玩具づくりの老職人」である。男は「葉も傷んでいないし、新芽がたくさん出ている」と喜ぶ。運送屋が「この季節だから、うんと値が張るよ」というと、男は「どうでもいいことさ、いくらだろうが俺にとっては安いもんだ」と受け流す。

以上のような簡単な分析から、ディケンズの作品に描かれる庭および関連する描写のほとんどは、時代の急激な変化のなかで庭の意味も変化しつつあったこと、すなわち上流階級の独占物としての庭から、幸せな暮らしを求める庶民の上昇志向の象徴としての庭への移行を示していると考えていいだろう。

ただし「庶民」をどう定義するかは、きわめて重要ではあるが、簡単ではないだろう。「上昇志向」が顕著にみられた階級として、「上層中産階級 (upper-middle class)」と「下層中産階級 (lower-middle class)」そして「労働者階級 (working class)」をあげることができるだろう（「労働者階級」以下の人々もディケンズの小説には登場するが、彼らには上昇志向など無縁だったものと考えられる）。この三つの階級を中心とした階級間での人の動きが激しい時代だったことがディケンズの作品からうかがえる。

本研究の目的と密接に関係しそうな記述は、やや外れる例として拾い出した「市場向け菜園 (market garden)」と「鉢植え植物 (flower-pot or potted flower)」だろう。本稿の最後に、それらがどのようなものだったかを、類書が少ないなかで見つけた資料を紹介しながら考えてみたい。

「マーケット・ガーデン」すなわち当時の近郊農業

まずは「market garden or gardening」とはなにか？ 試みに「Wikipedia(英語版)」で調べてみると、いろいろな意味で使われているようだが、おもに最近の、野菜や花など生鮮ものの直販を主とする小規模農園を指している。「地産地消」など近年の流れのなかに位置づけていいのかもしれない。

本論で扱っているのは19世紀半ばのロンドンとその近郊のことだが、この時代のこの地域の近郊農業については、次の資料が参考になる——Malcolm Thick, 1998. *The Neat House Gardens: Early Market Gardening around London*. (Prospect Books)。ロンドン近郊の野菜などを栽培する農園の歴史を15世紀

からたどり、ロンドンの人口の増加にともなう近郊農業の発展と、郊外からさらに遠くへの移動と拡大とが追跡されている。今日から見て驚くことは、メインタイトルになっている「ニート・ハウス農園」がテムズ川北岸のピミリコ (Pimilico) 地区、すなわちウェストminster地区とチェルシー地区のあいだにあったことだろう。いまでは街中の高級住宅地である。

ロンドンの市民が消費する食糧のうち、小麦やジャガイモなど保存と輸送に耐えるものは遠隔地から運ぶにしても、野菜など生鮮品は都市近郊で栽培されていた——東京では遠い過去のことだが、地方都市ではいまも盛んに行われているところがある。また最近の「地産地消」という掛け声は、近郊農業の復活と再興がうたわれているのだと理解することもできる。

花卉類がロンドン近郊の「market garden」で栽培されていた形跡は、この資料で見るとかぎり、切り花にしても鉢植えにしても見当たらない。しかし、ロンドンから遠くないどこかで栽培されていたはずであり、今後の重要な課題として残されてしまった。

しかし鉢植えの植物がロンドンで栽培されていたらしいことについては、それをしめす資料がある——Catherine Horwood, 2007. *Potted Flower: The Story of Plant in the House*. (Frances Lincoln)である。この資料によれば、鉢植え植物を室内(および中庭など)に置く習慣は、切り花を花瓶にいける習慣よりずっと古いようであり、また上流階級から下層の庶民にいたるまでかなり広く浸透していたらしい¹⁹。

「鉢植え植物」、コヴェント・ガーデン市場、メイヒューの貧民調査報告

この資料(Horwood, 2007) のなかで、本論との関係でとくに興味をひかれるのは、ロンドンの「コヴェント・ガーデン (Covent Garden Market)」の役割と、1864年に実施された「貧民のためのウィンドウ・ボックス」品評会²⁰である。

コヴェント・ガーデンは17世紀初頭からロンドンの主要な市場であり、1800年前後とされる絵には、その一画で鉢植え植物が売られているようすが描かれている²¹。1831年には鉢植え用の温室 (the Bedford Conservatories) がコヴェント・ガーデン内に建てられた。そのほかの記述や図版から、コヴェント・ガーデンでの鉢植え植物の売買は、とくに19世紀半ば過ぎから盛んに

なったと思われる。また買い手が身なりのよい紳士や淑女であることも、図版からわかる。売り手がどのような人々か、また栽培がどの地域でどのような人々によってなされたかは、かならずしも判然としないが、小規模の種苗業者が自分たちで持ち込んで販売していたのではないかと思われる。

コヴェント・ガーデンと鉢植え植物の流通についての補足データとして、19世紀半ばのロンドンの貧民の実態調査として有名なメイヒューの資料²²を整理してみたのが表4である。本稿での議論に直接に関連するのは、表4中の02・03・04および08と10であろう。

とくに03の記述から、「呼売商人たち」が鉢植え植物をコヴェント・ガーデンで仕入れ、ロンドンで売り歩いていたことがわかる。「ムスクとモクセイソウ……赤いゼラニウム」は室内用、「ギンバイカ、月桂樹にツゲ……ニオイヒ



PLATE I

May—'All A-Growing!'

Exchanging old clothes for potted plants

Etching by George Cruikshank, from *The Comic Almanack*, 1835-43.

バ、ガズミ……ヒース」の鉢植えは中庭や庭用だろう。興味深いことに、室内用の鉢植え植物はどれもが芳香の強い種類である。

「スマレの大きな花束」(02)は、切り花を束ねたものとしか考えられないだろう。それを「抱えた花売り娘が、香りをふりまきながら走っていく」というので、ニオイスマレ (*Viola odorata*) とみなすことができる。花茎がそう長くは伸びないので、花束といっても御婦人や紳士が襟元につける小さなコサージュだったと考えられる。

「しおれたスマレ」(04)が花束なのか鉢植えなのかは、この記述からだけでは判断がむずかしいが、切り花の持ちの悪さを考慮するなら、鉢植えと見なすのが自然だろう——鉢植えで栽培し、そのまま商品とすることもあっただろうし、花が咲き切った花茎を切り取り、小さなコサージュにして花売り娘が売り歩いたのだらう。「花売り娘」については、「ロンドンの花売り娘」(05)と「二人の孤児の花売り娘」(06)のふたつの章で比較的詳細に報告されている。

鳥の巣売り屋の男が野山から集めてくる「サクラソウ、キンポウゲ、ヒナギク、マツユキソウ」(08)が、切り花だったのか鉢植えだったのかは不明。「裏草」と呼ばれていた「緑色のシダ」は、「小さな花束の後ろに入れるのに使われる」というので切り花(葉物)で売られていた可能性がある。

以上のメイヒューの調査からわかることは、1850年前後²³のコヴェント・ガーデンでは切り花も売られていた(ただし花束として)が、おそらく鉢植え植物のほうが量的にずっと多かったと考えられ、またそれを「呼び売り商人」が仕入れてロンドンの街角で売り歩いていたことである。呼び売り商人たちの顧客がどのような階層の人々だったかは、メイヒューの調査報告からはうかがい知ることができない。

ちなみに、本誌の前々号で紹介したヒバード『趣味のよい家庭のための田舎風装飾』(1856年)²⁴の「テーブルと窓の花卉装飾」の章の前半三分の一は切り花を使った装飾²⁵だが、庭やガラス室で栽培したものと屋敷の周囲の野山で摘み取ったものが使われ、どこかから購入するという記述はない。花瓶など道具類については、購入方法として個別の業者のほか、コヴェント・ガーデンの名前もあげられている。後半三分の二の窓辺の「ウインドウ・ガーデン」

で使われるのは、もっぱら鉢植え植物である。その鉢植えも自宅の庭やガラス室での栽培が基本であり、たとえばコヴェント・ガーデンや呼び売り商人から購入するという示唆は見当たらない。

しかし、当時のロンドンで鉢植え植物 (potted flower) が商品として流通していたことは、上記のメイヒューの調査報告からあきらかである。それではその鉢植え植物を買っていた顧客はどのような階層の人々だったのか？

前掲のHorwood (2007) の第11章は、「民衆のためのウィンドウ・ガーデン (Window gardens for the people)」である。その冒頭で、彼女は次のように述べている。

あるひとつの植物が、19世紀の不幸な労働者階級に対するヴィクトリア朝の感傷的な人々の態度を要約するとしたら、それは田舎家(cottage)の窓敷居にひとりわびしく鎮座するあわれな赤い“ゼラニウム”だろう。何百人もの芸術家たちが、恥ずかしくない暮らしをしなければという向上心のシンボルとして利用してきた。だがそれは、なんといっても安価であって路上マーケットで買うことができ、またどんなに不注意な家庭であっても枯れさせることが困難な植物だったのだ。

鉢植え植物は場所を選ばないし、乾燥に強いので水やりを忘れても簡単には枯れたりせず、なにより値段が安く、路上マーケットで購入することができた。だから庶民にも手が届いたということなのだろう。この第11章の主要な題材はSamuel Hadden Parkes師（ロンドンのブルームズベリー地区の、セント・ジョージ教区副司祭）が主催した庶民のための花の品評会 (flower show) である。パークス師がウィンドウ・ガーデニングを奨励したのは、スラム街の人々の生活環境の改善のため。これらの人々は「路上でクレソン、果物、小さな玩具を売って生活費を稼いで」いたが、ウィンドウ・ガーデニングにかける熱意は生半可ではなかった。

粗野な二輪車で野菜などを売り歩く野卑な行商人や路上生活者のアイランド人がたむろする低くなった中庭や路地でさえ、植木鉢が置か

れていない窓や花であずまやになっていない窓はめったに目にしない。「あずまや」と呼ばれるのは、これらの窓の多くがバージニアヅタ、クレソン、the pretty yellow ‘canariensis’、さらにはベニバナインゲン（この最後の植物はとくに馬丁や職工に好まれる）で鬱蒼となっているからだ。……窓の敷居棚……を緑色の手すりで囲い……安いお気に入りの花の鉢を並べている。しばしば大きな箱に肥沃な土を詰め、春にはふつうの赤いチューリップ、夏にはモクセイソウ、そして秋にはマリゴールドやキクを深く植える。²⁶

窓辺のあずまやの一部が、クレソンやベニバナインゲンという野菜であることは興味深い。見て楽しむだけでなく、おそらくそれ以上に、食用だったと考えられる²⁷。いわば窓辺のミニ家庭菜園であり、今日の集合住宅のベランダに置かれたコンテナ菜園を思わせる。

パークス師が企画した品評会の賞金は10シリング。「ガーデナーズ・クロニクル」1864年7月23日号に載った品評会についての記事から、当時のロンドンのスラムでどのような植物が栽培され、その展示を人々がどのように工夫したかがよくわかる。

展示されている植物の多くはペラルゴニウムとフクシアだが、そのほかに目についたものにリシマキア (Creeping Jenny)、黄色のキンチャクソウ (Yellow Calceolaria)、白と深紅色のナデシコ、ペチュニア、アジサイ、ダリア、ヴァーベナ、イラクサ・ゼラニウム (Nettle Geranium) と呼ばれる植物、Klosanthes、オレンジの木、ハウセンカ、モクセイソウ、ジャコウミゾホオズキ (Musk)、アスター、そしてフレンチ・マリゴールドとアフリカン・マリゴールドがあり……たくさんのジャガイモとラディッシュのあいだに一〜二株のヴァージニア・ストックが植えられた小さなたらい、救貧院 (workhouse) の種苗係が出品した透明なガラス瓶のなかで三年ばかり生きているイチイの小枝、箱一杯に繁茂したシダ、同じ人気の植物が植えられた貝殻、三段のイチゴ用ザル (three-deep Strawberry punnets) で作られたハンギング・バスケット……青花のロベリアを見事に咲かせたワ

イヤ製のハンギング・バスケット。

パークス師が観察した窓辺の植物や「ガーデナーズ・クロニクル」の記事で報告されている植物は、どこから来たものなのか。植物の種類から考えて、どこかから購入したというよりは、たがいに種子や苗を融通し合っていたと想像してみたい。

いずれにせよ、パークス師による「貧民のためのウィンドウ・ガーデニング」運動は、その前後の1820年代から1860年代に最盛期を迎えた職人層のフローリスト協会の活動とは性格をかなり異にしている²⁸。フローリストたちが伝統的に栽培と育種を競ってきた「フローリスト・フラワー」と呼ばれる植物は、プリムラ・アウリキュラ、チューリップ、カーネーション、ポリアンサス、ヒヤシンス、アネモネ、ラナンキュラ、ナデシコの8種であり²⁹、パークス師が奨励したウィンドウ・ガーデンで栽培されていた植物のなかには名前があがってきていない。

フローリストの協会がロンドンの北部や東部の各地域ごとに活動していたことも、Horwood(2007)は同じ第11章で紹介している。マイル・エンド、バスナル・グリーン、ハックニー、ポプラー、オールド・フォード、あるいはタワー・ハムレットといった地区であり、英国の卓越した種苗業者一族ロッディゲス(Loddiges)が18世紀からハックニーに種苗場を置いていたように、これらの地区は種苗業の盛んな地域だったようだ。しかし、19世紀の半ば過ぎには開発と建築がこれらの地域にまで押し寄せ、種苗業に必要な土地の確保が困難になっていったという。それでもこれらの地区のフローリスト協会は、19世紀末までは品評会を開いていた(ただし女性の参加を促すなど時代の変化はあった)。

このフローリスト協会活動が盛んだった地区の小規模種苗業者が、コヴェント・ガーデンに鉢植え植物を供給していた可能性は高いだろう。

結びにかえて

本題に戻れば、ディケンズの『炉辺のコオロギ』の貧乏な玩具職人が運送屋から受け取った「ちいちゃな花の鉢」は、おそらく上記の「フローリスト・フラ

ワ」のどれかだったと推測していいだろう。玩具職人が「いくらだろうが俺にとっては安いもんだ」と受け流したのは、栽培や品種改良の腕に自信があったからだと考えることができる。

整理すれば、庭など望むべくもない当時の貧しい庶民が楽しんでいた植物は、鉢植えの植物が中心だったと考えられる。また鉢植え植物には、窓辺で楽しむものと、育種や育て方を競うフローリスト・フラワーとがあった。

2種類の鉢植え植物のうち、フローリスト・フラワーは日本の江戸時代の富裕な町人階級で流行した変わり朝顔など「珍草奇木」趣味を思わせる³⁰。一方、スラム街の小路の窓辺の鉢植え植物は、いまま月島など下町に名残が見られる江戸の庶民長屋の小路の光景を思わせる——「朝顔に／つるべとられて／もらい水」(加賀の千代女)。

表1:ディケンズ『オリヴァー・トゥイスト』(原著初版:1838年)³¹

No	頁:行	抜き書き	備考
01	159上:08	大きな庭園やら立派な人のお屋敷やら……	
02	234上:13	……お花に水をやるのでも、小鳥の世話をするのでも、お嬢様を幸福にする用事……	
03	233下:07	……少し遠くにある田舎の別荘へと出発した。	
04	234下:02	別荘の壁にはばらやすいかずらが這い、木々の幹には蔦がからみつき、庭に咲く花が心地よい香をあたりに放っていた。	
05	240下:08	……毎朝六時に起きて、野花を摘んでは花束を……美しく朝食のテーブルを飾ること……お嬢さんの小鳥のために……上品に鳥籠を飾る術……庭の草花の手入れ……教会書記は本職が庭師……	
06	250上:10	病室を飾ろうと思って特に念入りに摘んだ花を抱えて……	
07	256上:18	小鳥の籠は……歌声を四方に放ち……美しい野の花がふたたび摘み集められ……美しさと香りでローズを喜ばせ……	
08	257上:01	格子窓のすぐ内側……花束が水に活けられ……毎朝毎朝花瓶には新しい花が活けられ……	

09	257上:21	格子窓のつきたいかにも田舎屋風な部屋で、窓のまわりにはジャスミンやすいかずらがからみつき……その香りでいっぱい……ここからは庭が見え、その向こうには庭木戸……小牧場……牧草地と森……広々とした景色が見渡された。	
10	413下:09	……村のすぐはずれに、独身者向きの小さな家を手にいれ……庭造り、植木、魚釣り、大工仕事……	

表2:ディケンズ『互いの友』(原著初版:1865年)³²

No	頁:行	抜き書き	備考
01	上014上:13	(ヴェニヤリング邸) 温室のドアの脇の客間……	
02	上018下:12	スイカズラの類が美しく絡まる、ポーチ付のつつましき住処……	
03	上027上:17	ヒヤシンスの球根型の粗末なランプ……	
04	上060下:02	(ボフィンの庵) 床には花盛りのカーペットが……目にも緩な植生……その花園地帯では……	
05	上061下:05	ゴミ山には、それぞれうねうね小道がついて……ふるい場やら近所が変わって見えるように……てっぺんまで登りゃ、近所の屋敷がまたとない眺め……	
06	上103下:16	クリフォーズ・インのカビっぼい小さな植え込み、	
07	上115上:05	(ウイルファー宅) 小さな庭をツツと横切り……	
08	上119上:22	(ウイルファー宅)庭の門の所に……	
09	上123上:06	(ヴェニヤリング邸) 大型馬車が翌朝の宴に華を添えるべく、玄関先で温室植物の積み荷を……	
10	上126上:12	大型馬車はバラ色の……階段に花を敷きつめ……	モーツァルト『魔笛』
11	上127下:19	(ティビズ令夫人) の造花は萎びることを知らず	
12	上128下:01	(花嫁) ヴェニヤリング持ちの花……召使いはリボンに花飾り……各バファーはボタンホールに花を一輪挿し……	

13	上 211 上:07	(ベティー・ヒグドン宅) 窓の外には上から下まで紐が数本釘づけされ……運命の女神が好意的であれば……ムラサキソラマメが伝うことになっていた。	
14	上 233 上:04	その下で死に果てる運命の、市場向け菜園の……	
15	上 233 上:15	(学校周辺) まっ黒などぶ川、キラキラのきゅうり温室、草ぼうぼうの空き地、たっぷり肥やした家庭菜園、レンガの陸橋……	
16	上 233 下:02 ~234 上	小さな宿舎のほこりっばい小さな庭で、花に水をやっていた女校長ピーチャー先生の……小さなじょうろに水を足すため……フタエの鼓動の高鳴りが、フタエ・アラセイトウとフタエ・ニオイアラセイトウの間で聞かれた……この花を明朝までにジャックの豆の木さながらに……	
17	上 256: 上07 ~下 09	(レン嬢)「……働いていると、ふと花の香りが……この辺りは、花がたくさん咲くようなところじゃないもの……それなのに……どこまでも続く、お花畑の香りがして来るの。あんまりバラの香りがするものだから……垣根の白やピンクのサンザシや、まるで知らない花ばかり、色んな香りがして来るわ……だってわたし、これまで花なんて、ほとんど見たことがないんですもの……多分、私の鳥は他の鳥より上手に歌って、わたしの花は他の花よりいい香りがしてよ。だって小さな子供だった頃……」。	
18	上 268 挿絵	ヴェニヤリング邸のテーブル中央の飾りは、背の高い器の「果物盛り」。パイナップル、ブドウ……	
19	上 272:下 12	仮に……氏の父祖伝来の森を抜け、スニッグズワージー・パークの緑なすブナを見上げつつ、かの高貴なる館に近づき、中庭を通り、玄関に入り、階段を上り、部屋から部屋を抜け……	
20	上 281:下 14	フレッジビーは桃のような頬を、というか、桃とそれが沿う赤き……カベとの折衷のような頬……	
21	上 284:上 21	バラ色というのは、バラの色……バラは『花の女王』と呼ばれるそうで……	
22	上 291 挿絵	(ジブシー会社の)屋上の庭	

23	上 297: 下 09	(会計事務所) 棚には……模造ビーズ……安時計の見本に、安花瓶の見本。外国物のおもちゃ……	
24	上 300: 上 17 ~ 301 上	(ジブシー会社)「上は鉛ぶきの屋根になって……そこに小さな庭を作っておるのです……親指の爪ほどの庭がございましたら……そのタイル張りの庭とやら……」。およそロマンスとは縁遠い、某かの粗末なツル植物の這わせてある煙突を背にして、二人はひたすら一冊の本に読み耽って……ありふれた果物の入ったありふれたバスケットと、数珠つなぎのビーズとスパンコールのぎっしり詰まったバスケット……後は二、三箱の粗末な花と常盤木とでこの庭は出来ており、荒涼と立ち並ぶ辺り一帯の寡婦然たる古煙突は……	
25	上 302: 下 08 ~ 303	(屋上の庭)「……とつてもくつろげるんでしてよ……どんなに休まるか……この静けさ、この空気……雲がせまい通りの上を、ずんずん流れていく……下のことなんて、ちっとも気にしないでね……お空の山には金の矢がさしているが見えるわ。そしてそこから、風が下りてくるのよ。すると、ね、死んでるみたいな気がして来るの……おお、それは静かだわ！……それは安らかで、それはありがたくってよ！……そして下のせまくて暗い通りから、みんなが生きて、わめいて、働いて、お互い大声で呼び合っているのが聞こえて来るの。そして、とつてもかわいそうになるんだわ！で、あんなに重かったクサリがすっかり外れて、それはそれは不思議な、素敵な、かなしい幸せがやって来るの！」	
26	上 308: 下 06	(テンプルのユージーンの部屋) 窓敷居の上の古い植木鉢……	
27	上 341: 上 22	(ベラと父が静かな場所を探して)「タワー・ヒルのトリニティ・ハウスのそばの庭はどうだろうね」	
28	上 344: 上 02	(ベラの想像) 二人はぶどう園の様子を見に行こうと、小粋なパーク(帆船)で出掛けるところ……	
29	上 359: 上 07	(ミルヴィー牧師) 自分の働いているぶどう園の多くの悲しむべき歪みや胴枯れ……	
30	上 365 の 訳注(二)	「ぶどう園」はしばしば「精神的、靈的努力の場所」(マタイ 20:1, 21:28, 40)	

31	上 368:下 03	(学校)その角を曲がった市場向け菜園……	
32	上 369:上 16	「ヘッドストーン先生がお庭を！」	
33	上 382:下 11	(プレゼント嬢の) 眼前には南の海かどこかの……遠い遠い島々の蟹気楼が浮かび……パンの木の木立ち……嬢の『エデンの園』の絶対必要条件……	
34	上 424:上 17	(ボフィン氏)「ええか、もしわしが『花市』やら、『音楽会』やら……何かの催しものの券を買って、大枚はたいて……	
35	下 014:上 14	(ユダヤ人)「わたくしの屋根の上の貧しい庭で御覧になった時に……」	
36	下 022 挿絵	「人形の洋服仕立て屋のための試着」、手に花束。	
37	下 023:上 05	(レン嬢)「いいこと、『公式ご招待』とか、『パークの園遊会』とか、『野外劇』とか、『お祭り』……	
37	下 082:下 21	『ゴミ山』の「うねうね小道」(上 61 ページ) を登って行った。	
38	下 125:上 14	村にはキリスト教の学校があり、その校庭に木を植える以上に悪質なユダヤ教的介入はないとの……	
38	下 159:下 22	……教育田園用出立ちの学究狩猟家の姿……	たとえ
40	下 224:下 06	(ベラの父親) 花がないもので悪しからず、と通りに笑みを振り撒きながら。	意味不明
41	下 279:下 13	心ここにあらずの盲導犬の、御主人に対す如く。	盲導犬？
42	下 287:上 18	(自宅)ベラは……庭を歩き……	
43	下 289:下 17	(新婚ベラの新居)小さな田舎家(コテージ)。	
44	下 290:上 09	(ベラ夫妻と父) 草花の咲き乱れるヒースの丘への素敵な散策へと……	
45	下 293:下 02	(祝婚ディナーの席で) オレンジの花を一片見つけ……フィンガー・ボールに浮べて……	
46	下 307:上 07	(新婚ベラ) その日一日の家事に……計って、混ぜて、切って、下ろして。叩いて、洗って、磨いて。切って、むしって、植え替えて、庭仕事あれこれ。縫って、繕って、畳んで、風当てして、ほんとに色々、何やかや。そして何よりも、勉強、勉強……『完璧な英国家庭の主婦』 ³³ なる聡明な一卷本……	
47	下 335:上 21	(学校)……庭で散歩をしていた。	

48	下 354: 下 04	(ユダヤ人)あの晩、屋上の庭で独り座って考えたのさ……	
49	下 355: 上 09	(同前)わたしはあの晩、屋上の庭に座って考えていたのさ。	
50	下 388: 上 20 ～	見たこともないような育児室があったら……階段には……素敵な花を飾る……赤ちゃんには花がわかるんですもの……最高に愛らしい小鳥たちを集めた飼鳥園(エイヴィアライ)……	
51	下 399: 下 08 ～	(豪華な新居)ベラが階段の下で足を止め……限りなく美しい花々で飾られ……素敵な飼鳥園……先の花々より色とりどりの熱帯の小鳥……金魚や銀魚、苔やスイレンや噴水や、不思議づくめであった。	
52	下 424: 下 05	(ウェッグの悪態)ウルワシの庭園が豚野郎どもに根こそぎほじくり返された日にゃあ……	
53	下 432: 下 21	(学校)彼が庭の門に掛け金を下ろし、背を向けたのは、寒く、厳しい、東風の朝のことだった。	
54	下 445: 上 10 ～	(ベラの妹と母親)「外来植物よ、ジョージ……飼鳥園よ……オルマル(代用金箱)時計よ……	

表3:ディケンズ『炉辺のおおろぎ——家庭のおとぎ話』(原著初版:1845年)³⁴

No	頁:行	抜き書き	備考
01	040:07	運送屋は……苔と紙で注意深くくるんだちいちな花の鉢を取り出した。	
02	065:05	中流階級のための郊外住宅、下層階級の……台所と部屋がひとつのアパート、上流階級の……首都の邸宅……	人形の家
03	085:09	あたしたち、結婚して以来……二週間に一度……ささやかなピクニックをしてきたわね。	半ば、冗談なのかも?
04	092:05	父のボクサーも母のボクサーも……	犬の名前?
05	133:13	……婚礼のために……馬の頭を花やりボンで飾って	

表4: メイヒュー『ロンドン路地裏の生活誌』(原典:1851年)³⁵。野菜・果物は省略。

No	頁:行	抜き書き	備考
01	上053:16	(「呼売商人の服装」) 女性の場合は……黒いヴェルベットもしくはワラの婦人帽子に多少のリボンか花をつけてかぶるのが一般的なスタイルで……	
02	上078:17	(「果物・野菜……コヴェント・ガーデン・マーケット」) スミレの大きな花束を抱えた花売り娘が、香りをふりまきながら走っていく。	
03	上081:12	(同前) アーケードの下では呼売商人が花(鉢植え)を買う。街頭でその花と古着を交換するのである。ここには鉢植えの花が小さな庭のように並べられており、ムスクとモクセイソウが甘い匂いをふりまき、赤いゼラニウムが、えもいえぬ芳香を漂わせ、背後の常緑植物の濃い緑色とみごとな対照をなしている。「ギンバイカ、月桂樹にツゲもあるよ」と売り子の一人が言う。「ニオイヒバ、ガマズミ、それからピンクの斑点がついたあの低木はヒースだよ。」	
04	上082:14	(同前) 今や市場のポンプのまわりにはベチャクチャおしゃべりな娘たちが集まって、しおれたスミレに水をやる順番をめぐって言い争っている。コヴェント・ガーデン劇場の踏み段には、靴さえない少女たちが座って、半ペニーと一ペニーの二種類の花束を作っている。	
05	上083~85	章「ロンドンの花売り娘」	
06	上086~92	章「二人の孤児の花売り娘」	
07	上192:13	(「ロンドンの安物屋」) 羽根の部分に造花をあしらった羽根ペン……	

08	下 029:03	(「鳥の巣を売る街頭商人」) 冬になるといろんな花や草木を集めてくるのさ。サクラソウ、キンボウゲ、ヒナギク、マツユキソウ、それに『裏草』もある。『裏草』なんて呼ばれているのは、小さな花束の後ろに入れるのに使われるからだ。イチイの木が生えているところから取って来るんだけど、緑色のシダなんだよ。／夏には、いま言ったやつほかにガマも取ってくるよ。詰め物にするのにガマを買うお客もいるんでね。小さいやつは『妖精イグサ』といって、大きいやつがガマなのさ。小さいのを『詰め物』に使うんだ。つまり、鳥に詰め物を入れて剥製にして、ケースの中でまるで生きているみたいに見えるように引き立たせるんだよ。鳥のまわりにもイグサを入れてさ。鳥の剥製師に十二本一ペニーでおれは売っている。大きいやつは腕白小僧たちが遊んだり叩き合ったりするのに買うんだ。
09	下 031:13	(同前) ウィタム……コヴェント・ガーデンで薬草屋をやっているバトラーさんに売るコケを探して、あのあたりに行きつけているからね。
10	下 032:02	(同前) 鳥の巣捜を始めるのは五月で、終わるのは八月ごろだね。それが終わると今度はクリスマスごろまでガマやイグサ取りだ。それも終わると草木や野生の花を採る仕事が始まって、五月ごろまでかかる。
11	下 079:06	……ユダヤ人だけが卸売している外国製品としては、時計、宝石、海綿、果実、特にオレンジ、レモン、ブドウ、クルミ、ココナツなど、乾燥した果実としてはナツメヤシ、さらに貝、亀、オウム、外国産の小鳥、珍品、ダチョウの羽根、嗅ぎ煙草、葉巻、パイプがある。
12	下 143:16	(「ごみ収集人」)……ロンドンの市場向けに農作物を作って大きな利益を上げているロンドン近郊の土地などには……

[注]

- 1 本稿は園芸文化研究所の2009年度助成研究(プロジェクト研究)「英国19世紀の庶民と園芸——ディケンズの小説を材料として」の初年度の報告書である。研究チームの構成は以下のとおり:榎本真理子(代表)、高濱俊幸、新妻昭夫。

- 2 次の資料に、雑誌や単行本などの急増を具体的にしめすデータが示されている——Cantor, G. et al. eds., 2004. *Science in the Nineteenth-Century Periodical: Reading the Magazine of Nature*. Cambridge Univ. Press. P. 9 & 10.
- 3 新妻昭夫「J・S・ヒバード（園芸ジャーナリスト）の生涯・I——“都会のなかの田園”」。『園芸文化』第5号:50～65ページ。
- 4 川崎寿彦（かわさき・としひこ:1829-89年）。英文学者で18世紀の英国の詩をおもに研究した。京都大学文学部卒業（1953年）、ウィスコンシン大学大学院修了（1958年）。Ph. D.、文学博士。名古屋大学文学部教授。スタンフォード大学、オバーリン大学、トロント大学客員教授。著書:『ニュークリティシズム概論』、『ダンの世界』、『分析批評入門』、『現代批評の展望』、『マーヴェルの庭』（研究社）、『鏡のマニエリスム』、『庭のイングランド』（1983年、名古屋大学出版会）、『楽園と庭——イギリス市民社会の成立』（1984年、中公新書723）、『森のイングランド』（平凡社）、『楽園のイングランド——パラダイスのパラダイム』（1992年、河出書房新社）
- 5 上記の注3参照。
- 6 上記の注3参照。
- 7 『英語青年』1989年1月号（研究社）。
- 8 該当箇所は、「ディケンズ・フェロウシップ日本支部」のHP上の電子テキストで検索すると、以下のとおり:……and as to flowers, it's worth a run upstairs to smell my mignonette, or to see the double wallflower in the back-attic window, at No. 6, in the court.' / 'There is a double wallflower at No. 6, in the court, is there?' said Nicholas. / 'Yes, is there!' replied Tim, 'and planted in a cracked jug, without a spout. There were hyacinths there, this last spring, blossoming, in – But you'll laugh at that, of course.' / 'At what?' / 'At their blossoming in old blacking-bottles,' said Tim. / 'Not I, indeed,' returned Nicholas……
- 9 Uglow, J., 2004. *A Little History of British Gardening*. Chatto & Windus, London の205-06ページ。同ページには、ディケンズの『ピックウィック・ペーパーズ』（1836-37年）の一節も引用されている。
- 10 ウェミックのゴシック建築モドキの自宅と庭は、Jane Brown, 1999. *The Pursuit of Paradise: A Social History of Gardens and Gardening*. の「The Military Garden」の章

にも引用されている(98-99ページ)。

- 11 ヒバードについては、前述の注3にあげた拙論を参照されたい。
- 12 前掲書、205-6ページ。
- 13 John Claudius Loudon (1783-1843) & Jane (Webb) Loudon (1807-58).
- 14 前掲書、211ページ。また別稿「ジェーン・W・ラウドンの生涯」(本号、196ページ～)を参照されたい。
- 15 Horwood, Catherine, 2007. *Potted History: The Story of Plants in the Home*. Frances Lincoln Limited. P.138.
- 16 ディケンズ『ピクウィック・クラブ』(1836-37年)の第42章。
- 17 「市場向け菜園」の原語は、「ディケンズ・フェロウシップ日本支部」のHP上の電子テキストで調べてみると、「market-garden」である。
- 18 同前。
- 19 Davies, J., 2000. *Saying it with Flowers: The Story of the Flower Shop from Victorian Times to the Present Day*. Headline Book Publishing.; Blacker, Mary Rose, 2000. *Flora Domestica: A History of Flower Arranging 1500-1930*. National Trust.これらの資料によれば、切り花を花瓶にいけることは、たとえば17世紀のオランダの静物画の主要な題材だったように、かなり古くからの習慣だった。しかし、貴族など裕福な上流階級に限られ、一般市民にまで広がったのは19世紀も半ばを過ぎたからのことだった。
- 20 Parkes, Rev. S. H., 1864. *Window Gardens For the People, and Clean and Tidy Rooms, Being an Experiment to Improve the Homes of the London Poor*.
- 21 Horwood (2007)に引用されている1809年のロンドン園芸協会紀要には、クロッカス促成栽培用の「ウエジウッド製のハリネズミ型の鉢」がコヴェント・ガーデンで売られていたと報告されている。
- 22 今回は「野菜」関係と「食べもの・飲みもの」関係は省略した。しかし、たとえば「クレソン売り」の章などは、前々号掲載の拙論で扱ったJ・S・ヒバードがクレソンの家庭での栽培を奨励していたことを考えあわせなくとも、非常に興味深い記録となっている(『園芸文化』第5号:50～65)。
- 23 メイヒューの貧民調査の記事は最初、1849年に『モーニング・クロニクル』紙に掲載されたので、調査が実施されたのも同年前後だったと考えられる。

- 24 Hibberd, S., 1987. *Rustic Adornments for Homes of Taste, and Recreations for Town Folk in the Study and Imitation of Nature*. (Introduction by D. J. Sales). Century in Association with the National Trust。注2も参照されたい。
- 25 切り花をどう長持ちさせるかの工夫も発想も、今日とはまったく異なっていたようだ。今後の課題のひとつとしたい。
- 26 福音雑誌『*The Day of Rest*』1865年9月号にパークス師が寄せた記事。パークス師の率直な驚きの言葉と比べると、二年前の『園芸文化』掲載の拙稿『ヒバードの生涯 I』に引用したロンドンの庶民の園芸趣味の惨めな状態についての記述(『園芸文化』第5号の54～55ページ)は、ほぼ同じものを見ているとは考え難いほどだ。貧しい階級出身のヒバードだが、彼の上昇志向がそれほど強かったということなのだろう。
- 27 数年前に大阪の都市部の園芸について予備調査をしたとき、年季の入った集合住宅の共用の庭の花壇に、インゲンや菜っ葉、キュウリなど野菜が植えられていて印象的だった(隅には仏花用と思われる小菊類が必ずあった)。住人達の野菜作りにおける情熱は道路にまでおよび、街路樹の根元にもキュウリや菜っ葉が植えられていた。庶民の生活の知恵と生活力の旺盛さは、時代も文化も超えて普遍的なことの証といえよう。
- 28 フローリストの活動と彼らが栽培と育種を競ったフローリスト・フラワーについては、次の文献がほぼ唯一の資料と思われる。Duthie, R., 1988. *Florists's Flowers and Societies*. Shire Publications Ltd (Princes Risborough).
- 29 19世紀の半ばになって、さらにパンジー、ダリア、キクが加わり、とくにダリアとキクが流行ったという。
- 30 小笠原左衛門尉亮軒『江戸の花競べ——園芸文化の到来』(2008年、青幻舎)。
- 31 チャールズ・ディケンズ (小池滋訳)『オリヴァー・トゥイスト』(講談社版/世界文学全集13)。一九七〇年、講談社。
- 32 チャールズ・ディケンズ(田辺洋子訳『互いの友(上・下)』)。一九九六年、こびあん書房(東京)。
- 33 Mrs Beeton's Book of Household Management was edited by Isabella Beeton and was first published as a book in 1861.
- 34 チャールズ・ディケンズ (伊藤廣里訳)『炉辺のこおろぎ——家庭のおとぎ話』。

二〇〇四年、近代文芸社。

- 35 ヘンリー・メイヒュー(ジョン・キャニング編)『ヴィクトリア朝ロンドン路地裏の生活誌 (上・下巻)』(植松靖夫訳、1992年、原書房)。原著はJohn Canning, ed., 1986. *The Illustrated Mayhew's London: The Classic Account of London Street Life and Characters in the Time of Charles Dickens and Queen Victoria*. Weidenfeld & Nicholson (London). この原本になったのは、Henry Mayhew, 1861 (1851), *London Labour and the London Poor*. この原本からの新たな抜粋・翻訳が、ヘンリー・メイヒュー(松村昌家／新野緑編訳)『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』(2009年、ミネルヴァ書房)。